

お わ り に

本研究は、平成13年度から2年間にわたり、中学校の国語、社会、数学、理科、英語の学習指導における評価の在り方について取り組んできたものである。研究に当たっては、これからの評価の在り方等を明確にし、本県の実態について調査しながら、具体的な進め方について考えた。さらに、実践研究講座の中で実証授業を通して研究が実践的なものになり、それが学校で生かされるようにした。

具体的な研究の成果としては、これからの評価の在り方を明確にし、具体的な評価規準の作成の仕方や評価規準を基に手だてや方策、評価方法を盛り込んだ指導と評価の計画を示すことができた。

また、改善のポイント等を基に指導と評価の計画を立てて授業に臨むことで、授業のイメージが具体的になり、その有効性を感じる事ができた。

課題としては、作成した評価規準や指導と評価の計画、具体的な評価方法が、客観性や信頼性をもつために絶えず見直しや研修をしていかなければならないということである。そのためには、これからの授業の中で実際に使いながら改善していくことが必要だということである。

学習指導要領のねらいを実現するためには、学校における評価が評価のための評価、つまり単なる総括機能に終始せず、生徒一人一人に、学習指導要領に示された基礎的・基本的な内容が確実に身に付いているか、自ら学び自ら考える力がはぐくまれているか、などを適切に評価し、指導の改善に生かしていくことが重要である。

今後は、本研究で明らかになった成果と課題を基に、評価を学習指導に生かしながら、指導法の工夫改善に向けて、より一層研究を推進していきたい。

最後に、本研究を進めるに当たってご指導いただいた、鹿児島国際大学千々岩弘一先生、鹿児島大学教育学部の上谷順三郎先生、溝口和宏先生、植村哲郎先生、八田明夫先生、樋口晶彦先生、並びに実践研究を進めてくださった研究協力員を始め実践研究講座を受講者された先生方、及び、実態調査にご協力いただいた県下各中学校に、心からお礼を申し上げたい。